



「日本語は難しい」～ 片仮名が正しく書けない～

「日本語は難しい」として、先月は文化の違いや「て・に・を・は」等に関して述べました。今回は、片仮名を取り上げます。

今年度始めの朝の打合せのことです。突然、ある担任から「高学年になっても片仮名が正しく書けない子がたくさんいます。」との発言があり、放課後に次のような間違い例を記したメモをいただきました。



〈ある日の授業から〉

- ①「ヲ」や「ヌ」が書けない
- ②「モ」(←正しくは「モ」)
- ③「ミ」「三」(←正しくは「ミ」)
- ④「エ」(←正しくは「コ」)
- ⑤「シ」と「ツ」や「ソ」と「ン」、「ネ」と「ネ」との混同
- ⑥「ア」と「了」との混同
- ⑦「ホ」と「求」との混同
- ⑧「チ」と「千」との混同

忘れていたり、覚え違いや似ている字形との混同があったりするなどいろいろな間違いがみられました。

ところで、片仮名は、小学部1年生から学習します。「ズボン」や「ポケット」など、日常生活の中でより身近なものの表記からの導入です。そして、2年生までに「シャツ」や「ナツ」のような拗音や促音、「シー」のような長音、「バス」や「ペン」のような濁音や半濁音など、表記の仕方をすべて学習します。また、同学年でその使い方についてまとめます。教科書には次のように整理して示されています。

— 《「かたかなで書くことば」(『こくご 2下』) ※ () 内→表記は高橋》 —

- どうぶつのなき声 (→擬声語：声)
- いろいろなものの音 (→擬音語：物音)
- 外国から来たことば (→外来語)
- 外国の、国の名前や土地の名前、人の名前 (→外国の固有名詞)

この学習以降は片仮名を使った文作りなどをとおして定着を図り、6年生で「片仮名の起こり」として、字体の由来を学習し、一応、終了となります。「江」→「エ」、「乃」→「ノ」、「毛」→「モ」といった具合です。

以上のような、学習の流れ(カリキュラム)を踏まえ、特に小学部の1年生や2年生では、年間を通して授業の中で、また、家庭学習として繰り返し学びます。1年生では専用の『カタカナ』のドリルも使っています。平仮名には「ふ」「ぬ」のようにカーブのある文字がたくさんありますが、それと比べ片仮名は少ないので、むしろ書きやすいと口にする子どももいます。

間違いに話を戻します。①にある「ヲ」は、ほとんど使用しないと言ってよいでしょう。また、⑧の「チ」や②の「モ」は、由来が分かれば書けるかもしれません。しかし、6年生までは待てません。

授業で学んでも、2～3年経つと多くを忘れるのはなぜでしょう。考えられるのは、使用頻度の少なさです。英国内で片仮名を目にしたたり書いたりするのは、習得を目的とした授業や家庭学習として課された場合や、子どもによっては自分の名前を書く時くらいではないかと思われます。日常生活の中で目にするとしても、平仮名よりずっと少なく、また、基本的な五十一文字が偏りなく出てくるわけでもありません。それが片仮名を忘れ、また、間違い大きな理由だと考えられます。

では、どうすればよいのでしょうか。やはり片仮名に多く触れさせ、使用頻度を増やすことです。完全にグローバル化した時代です。今や片仮名が載っていない日本語の本はありません。日本語の本を多く読むようにしたり、短くてもよいので、たまには片仮名で日記を書いてみたりしたら、間違いは少なくなると考えます。